

氏名	ササキ 佐々木	ススム 益
学位の種類	博士（文化財）	
学位記番号	博美第344号	
学位授与年月日	平成23年3月25日	
学位論文等題目	〈作品〉重要文化財「羅漢図」2幅のうち「因掲陀尊者」東京藝術大学大学美術館蔵の模写 〈論文〉肌裏紙が絵画に与える影響に関する研究－古典絵画（絹本）修理時の肌裏紙の選定を中心として－	
論文等審査委員		
（主査）	東京芸術大学 教授	（美術学部） 宮廻正明
（論文第1副査）	〃 客員教授	（ 〃 ） 有賀祥隆
（作品第1副査）	〃 准教授	（ 〃 ） 荒井経
（副査）	〃 教授	（ 〃 ） 木島隆康
（ 〃 ）	国立文化財機構 職員	鈴木晴彦

（論文内容の要旨）

本研究では、絹本絵画の肌裏紙（第一層裏打紙）について、裏打紙として本紙を補強する役割と共に、本紙画面に与える視覚的な影響に着目し、実際に模写の裏打ちを通して検証を行った。

具体的な研究方法として、まず実際に旧肌裏紙を観察することができた修理作品3件（個人蔵「薬師三尊像」、静嘉堂文庫美術館蔵 重要文化財「弁才天像」、個人蔵「十六羅漢像」）を例に、肌裏紙の考察を行った。次に、肌裏紙の色味の違いが、本紙画面の印象に及ぼす影響を具体的に知るために、古色や欠損を疑似的に再現した模写サンプルによる比較検証を行った。サンプルによる検証結果を受けて、東京藝術大学大学美術館蔵 重要文化財「羅漢図」2幅のうち「因掲陀尊者」の模写を制作し、実際の修理を想定して肌裏打ちを行った。肌裏紙の異なる複数の模写の比較検討により、肌裏紙が作品にどのような影響を及ぼしているのかという点について明らかにした。

日本の伝統的な絵画や書は、掛軸・屏風・襖・卷子・冊子など様々な形態と表装を伴って現代に伝えられている。これらの作品は、和紙や絹といった脆弱な材質の上に描かれているものが多く、きわめて環境の変化を受けやすい。現存する作品の多くは、約100年から200年の周期で修理が行われていると考えられ、古いものでは、現在に至るまでに数回の修理が繰り返されていることになる。その度に肌裏紙は取り除かれ、新しいものが補われてきたと考えられる。

研究対象である肌裏紙は、装潢・修理において、本紙を補強するために用いられる裏打紙の一つである。絹本の肌裏打ちには、制作当初は染められていない肌裏紙を用いるが、時代を経るうち本紙画面の状態は変化し、裏打紙自体も劣化する。そのため、修理の都度、作品の状態に合わせて新たに肌裏打ちを施す必要がある。修理におけるその施工方法は、本紙に裏打ちされている旧肌裏紙を除去し、本紙に欠失や損傷が見られる場合は補絹を施し、新たに肌裏紙を調整する。新規の肌裏紙は、本紙画面の風合いや損傷状況、作品の図様などに配慮し、染めた上で、本紙全体の整形・補強処置を行う。過去の修理事例の調査により、修理時の肌裏紙は時代毎の修理理念に基づき、色味や施工方法が選択されていることが分かった。特に江戸期の修理では、墨染された肌裏紙が多く認められ、こうした修理前・修理後の肌裏紙の色味の違いにより、作品の印象に変化が生じた例も少なくない。

これらの修理例から、装潢・修理に用いられる肌裏紙は、単に本紙補強のため役割と共に、絹の透過

性を利用して意識的に本紙画面の色味を調整していると見られ、新規の肌裏紙の色味の選定方法が非常に重要であることが分かった。肌裏紙を調整する理由としては、主に次の三つの目的が考えられる。

- (1) 仏画などの尊像を際立たせるため
- (2) 剥落や欠損部分を周囲と調和させるため
- (3) 描線や彩色箇所を活かすため

これらの目的に即した肌裏紙の色味を具体的に検証するため、サンプルを作成した結果、肌裏紙の色味や濃さが、主に線描の見え方の強弱・彩色部分の発色・地透け部分の色調に大きく影響することが指摘できた。さらに、「因掲陀尊者」の模写の肌裏打ちでは、染めていない肌裏紙、墨染めの肌裏紙、矢車と墨で色味を調整した肌裏紙の三種類を用意し、実際の装潢により、肌裏紙の色味が画面にどう影響するかを視覚的に明らかにした。

本研究では、目的に合わせた肌裏紙の色味の選定の重要性を指摘し、様々な条件に合わせて肌裏紙を効果的に使用することにより、劣化が進んだ作品をより効果的に見せる方法を模索した。肌裏紙が単なる補強の役割と共に、作品の印象を左右する大きな役割を担っていることが明らかになったといえる。

新規の肌裏紙の色味の選定は、作品の剥落や損傷の状態、修理時に除去した旧肌裏紙の色味、絵絹の色味、作品の図様や各種彩色箇所、また修理前からの作品が持つ印象などに留意する必要があるといえる。これら様々な条件から作品に適した色味を導き出すには、「絵画を読み解く」という作家の能力を活かすことが有効と考えられる。本研究では、今後の修理時の肌裏紙の選定に際し、基本的な資料として活用される成果を提示することができた。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、東京藝術大学大学美術館所蔵の中国・南宋時代（13世紀）に制作された重要文化財「羅漢図」2幅のうち「因掲陀尊者」の模写を制作し、実際の修理を想定して肌裏打ちを行い、その際に肌裏紙の色味を替え、複数の模写を制作し、比較検討することによって、肌裏紙、就中、肌裏紙の色味が本紙画面すなわち作品に如何なる影響を及ぼすかについて解明すべく論述したものである。

本論文は、序論、第1章・肌裏紙について、第2章・肌裏紙の調査研究、第3章・サンプル実験による肌裏紙の比較研究、第4章・模写制作および装潢からの検討、そして総括で構成される。論述の中で、実際に修理が施工されている仏画の肌裏紙を調査することによって、過去における修理時の肌裏紙が時代ごとの修理の理念に基づいて、肌裏紙の色味などが選定されていることを明らかにする。それとともに、肌裏紙の色味を具体的に検討するためにサンプルを作成し、肌裏紙の色味や濃さが本紙画面の線描や彩色、地透け部分の色調に大きく影響することを検証し、その上で「因掲陀尊者」の模写の肌裏打ちに三種類もの、すなわち(1)染めていない肌裏紙、(2)墨染めの肌裏紙、(3)矢車と墨で色味を調整した肌裏紙を用意し、実際の装潢によって肌裏紙の意味が本紙画面に影響することを一今まで漫然と感覚的には理解されていたことではあるが一視覚的に見て分かるように明らかにした。その論述は、具体的で形式、内容とも妥当で、本論文は今後、修理時の肌裏紙の選定に際し、実証的な基本文献として活用されよう。

(作品審査結果の要旨)

本作品は、肌裏紙が絵画に与える影響を可視的に証明するために、東京藝術大学大学美術館所蔵の『羅漢図』（重要文化財）2幅のうち「因掲陀尊者」を対象として制作した現状模写3点である。

肌裏紙は、本紙を補強する役割をもつとともに、画面の色彩にも多大な影響を与えるため、修理時に交換される肌裏紙の色合いは慎重に選定されなければならない。本研究で制作された模写3点は、ほぼ

同一に描かれた現状模写であるが、それぞれに①染めていない肌裏紙、②墨染めの肌裏紙、③植物染料の矢車と墨で色味を調整した肌裏紙といった異なる肌裏紙による裏打ちが施され、裏打ちが画面に与える影響を可視的に比較できるように制作されている。また、軸装の仕立ての進行で見えなくなってしまう肌裏紙を増裏紙や総裏紙によって覆わず、本紙裏面の状態が確認できるよう鑑賞者の理解を助ける配慮もなされている。

本研究のテーマは、修理の現場において行われているプロセスを学術的に検証したものであり、本作品は、一般の鑑賞者に意識されない表装の構造の一部である肌裏紙が、鑑賞に与える影響の大きさを顕在化させるモデルとして、審査申請者が培ってきた描画の能力と表装の能力が有効に駆使された優れた作品といえる。

(総合審査結果の要旨)

日本の伝統的な絵画や書は、和紙や絹という脆弱な基底材の上に描かれているものが多く、その保存方法も独自の進化を遂げてきた。その最も優れた方法として、100年から200年毎に肌裏を取り替えることにより継承されてきた。修理時には、古い肌裏紙は取り替えられ現在にいたるまでに数回の修理が繰り返されてきたものもある。環境や経年変化による変色は著しく、特に絹本に描かれたものの肌裏紙の作品に与える影響は大きい。そこで、修理の度毎に作品の状態に合わせた肌裏紙の色の選択が重要になってくる。しかしながら現在まで肌裏紙の選定についての研究はあまり行われてなく、修理業者の経験に任されてきた。

そこで今回の研究により初めて、肌裏紙の作品に与える影響を同一作品の模写を使い明確にその色や線の見え方の違いを実証してみせた。その結果、作品の剥落や損傷の状態、修理時に除去した旧肌裏紙の色味、変色した作品の色味、描かれた当初の作品の色味等、今後の肌裏紙の選定において大きな指標となる成果をあげることができた。

本研究を進めるにあたり他の作品の修復実習も行い実践による多くの経験をつみ、サンプル収集にも努め多くの検証結果を得た。

肌裏紙の選定にあたり、作品を制作する立場・修理する立場・美術史的立場からを総合して判断している点は今回の研究で最も優れている点であり、今後の保存修復に与える研究として高く評価できる。